

保育者養成校における「音楽リズム」教育方法の一試案 — 3歳未満児の音楽指導について*

三 好 良 枝

A Tentative Plan for a Method of Education about “Music Rhythm” for
Nursery School — Methods of Teaching the Rhythm of music for Chil-
dren under Three

Yoshie Miyoshi

1. はじめに

3歳未満児（以下未満児と記す）の「音楽」は、音楽前活動¹⁾として扱われ、「音楽」の領域として独立しておらず、子供の日常生活や、遊びとの結び付きの中で捕らえられている²⁾。音楽前活動は、子供が主体的に歌ったり、動いたり、あるいは楽器を弾いたりといった活動ばかりではなく、特に、乳幼児においては、日常の生活の様々な場面での身体の動きや発声、音に対する素朴な興味など、直接、音楽の活動としては捕らえにくいものもある。

しかし、やがて、音楽活動の芽生えにつながるような、その種を蒔く時期として未満児をみつめ、理解し、育てていくことが必要であると考え。そして、さらに、その音楽前活動が豊かに展開されることによって、3歳以後の領域の「音楽」が子供一人ひとりの身体的・精神的な発達にそった、生き生きとした、活発な活動へと結び付いていくものと思われる。

このような、未満児の「音楽前活動」に対する視点を、将来、保育者となる学生は、はっきり認識し、具体的にどのような方法で取り入れ、活動していくかを修得することが必要であると考え。

以上のような観点から、保育者養成校での教育方法として、グループによる自主的学習を試み、小集団による理論の学習と並行して、資料に添った実技実習を行い、その結果を、全国保母養成協議会第25回研究大会において発表をした¹⁾。すなわち、その試みに参加した学生の85.3%が、その学習以前に比較して未満児の音楽活動に対して意識が変わったと答えており、学習効果はあったものと言える。中でも、「未満児の音楽教育は見当もつかなかったが、どんなものが具体的に分かった」、あるいは、「子供の発達段階を充分頭に入れて、音楽活動を行う

*1988年11月11日 第四回中国・四国地区大学音楽研究会（於鳥取女子短期大学）にて発表

必要があると認識した」など、具体的な理解も深めていることが特筆できる。しかし、未満児の音楽活動の実技実習を行ううえで、特に乳幼児の場合は、シミュレーションが行いにくいので、その点で課題を残した。

学生は、一般に乳幼児に接した体験が少ないので、その発達段階や生活状態を実感として把握しにくい欠点も持っている。そのことから考えて、乳幼児を対象とするシミュレーションは、実施が極めて困難であり、問題点も多い。

そこで今回は、未満児に対して保育者が、どのように活動しているかの実践VTRを見せ、未満児の音楽指導についての理解を、さらに深めさせたいと考えた。

以上のことについて、養成校での「3歳未満児の音楽指導」について、どのように認識・習得させるかについての試案を述べる。

2. 内容および方法

前回は、学生を小グループに分け、その中で自主的学習により、相互に刺激し合い、また、議論や意見交換をするという方法を試みて、未満児の音楽活動に対しての、学生の理解を深めることができた。しかし、なかには与えた資料を細分化したり、読んで理解するまでに時間がかかり、互いに議論するにいたらず、効果の上がらなかったグループもみられた。

また、学生の中には、理論的な理解はできても、低年齢ほどシミュレーションが行いにくく、保育者の働き掛けに対する乳幼児の反応の理解ができず苦慮している者もいるように思われた。

そこで今回は、それらを補うために、山口県内5ヵ所の保育園において未満児の生活や音楽活動の一部をVTRに撮り、ビデオ機器を使った教育方法を試みた。すなわち、そのVTRを学生に見せることにより、未満児の実態や発達段階をより具体的に、また生々しい実感として把握させたいと考えた。

2・1 講義および演習の時間配分

次のような時間配分で講義と実技を行った。

- 第1回：収録したVTRを見せる
- 第2回 } 未満児の音楽教育について講義
- 第3回 }
- 第4回 } 各グループで実技の発表・反省
- 第6回 }
- 第7回：再度VTRを見る

第1回目として、学生が、これから学習する未満児の音楽活動に興味と関心を持たせるため

に、導入として、未満児の発達段階や未満児に対する保育者の働き掛けなど、実際の現場のVTRを見せた。また、学習した事柄の再確認を行うために、学習の終了後、再度VTRを見せた。すなわち、同じVTRを、学習の初めと終わりの2度見ることで、未満児の発達段階と成長を考慮した活動を、いつ、どのような形で取り組んだらよいか、活動に対する子供の反応をどのように捕らえ、それをいかに発展させていくか、といった具体的な理解を深めることを目的とした。

2・2 意識調査

なお、第3回の講義の終了後と第7回のVTRを見聞した後に学習の意識調査を行った。意識調査の項目は次の通りである。

2・2・1：第3回目終了時の意識調査（前期調査）

- (1) 「3歳未満児の音楽活動」について、学習する以前と、現在とでは意識が変わりましたか。
(はい いいえ)
- (2) それは何故ですか。
- (3) 保育者は「3歳未満児の音楽活動」について、どのように考えたらよいでしょう。VTRや講義の中から、あなたの考えを書いて下さい。

2・2・2：第7回目終了時の意識調査（後期調査）

- (1) 実際に実技実習をする以前と、した後では「3歳未満児の音楽活動」についてのあなたの意識が変わりましたか。
(はい いいえ)
- (2) それは何故ですか。
- (3) 学習する以前にVTRを見た時と、再度見た現在とでは、あなたの受け止め方は変わりましたか。
(はい いいえ)
- (4) それはどのようなことですか。

表1 学習意識変化の有無に関する回答結果

回 答	前 期 調 査	後 期 調 査
は い	94.6%	96.1%
い い え	5.4%	2.6%
無 回 答	—	1.3%

3. 結 果

二度にわたる意識調査の結果は、表1に示す通りである。すなわち、理論学習後の調査においては94.6%、VTR学習後の調査では96.1%の学生が「未満児の

音楽活動」に対する意識が変化したとしている。意識変化の具体的な内容については、表2に示すような結果となった。

表2 学習意識変化の具体的な内容と回答率

	理論学習による意識変化	V T R 学習後の意識変化		
1	年齢別に指導しなくてはいけないことが分かった	32.4%	保育者の子供への接し方を注意して見た	24.3%
2	学習したから分かってきたので	30.0%	自分達の行った実技と照らし合わせて見た	14.9%
3	知らないことが多かった	17.6%	指導方法が具体的に理解できた	12.2%
4	子供にとって音楽が大切だと分かった	14.9%	発達段階と指導法の関連が把握できた	10.8%
5	考え方が変わった、意識するようになった	6.8%	歌唱による活動の重要性を感じた	9.5%
6	領域がこんなに広いとは知らなかった	2.7%	保育者の責任の重さを感じた、不安になった	9.5%
7	色々な技術があることが分かった	2.7%	子供の発達段階を把握できた	9.5%
8	V T Rを見て	2.7%	保育者の働きかけによる子供の反応を意識して見た	8.1%
9	以前より真剣に考えるようになった	1.4%	指導の目的をもって活動することが必要だと思った	6.8%
10	しっかり勉強しなくてはいけないと思った	1.4%	生活の中に音楽を取り入れることの大切さを感じた	4.1%
11	うまく教えられるか不安になった	1.4%	未満児の音楽活動の重要性を感じた	2.7%
12			園や保育者の指導方針による違いを感じた	2.7%
13			今後勉強すべき課題を見つけた	2.7%

(複数回答)

前期意識調査では、「今までは0歳も、1歳も、3歳でも、同じような音楽活動をしているのだろうと思っていたが、乳幼児は発達が著しいので、年齢別によく考えた指導をしなくてはいけないことが分かった」、あるいは、「今までは、年齢別の幼児の音楽活動のねらいがよく分からなかったが、発達段階に応じて、ねらいと活動の仕方が違うということが分かった」など、「年齢別に指導しなくてはいけないことが分かった」が32.4%であった。

また、「音楽リズムの講義を受けて、色々分かって来た」「学習する以前は、どういう活動をさせるのか詳しく分からなかったが、講義を受けてからは具体的に分かってきた」といったように「学習したから、分かってきた」という意見が30.0%であった。

「1歳未満の子供達にも音楽活動があるなんて知らなかった」「0歳の子供達にも、音楽活動があるとは思っていなかったし、音楽活動がこんなに大切とは思わなかった」など、未満児の音楽活動について「知らないことが多かった」とする学生が17.7%もいた。

「学習するまでは3歳未満児の音楽活動がこれほど重要で、子供達にとっても将来、色々なことで影響を受けるなど知らなくて、深く考えていなかった」「音楽活動の指導の仕方の違いで、子供の先々に影響することを知り、音楽がいかに大切であるかが分かった」「乳幼児の頃の音楽が、その子供にとって、どういうものであるかということ深く考えさせられました。今まではそれほど考えていなかったの、音楽活動の重みを知らなかった」というような「子供にとって音楽が大切だと分かった」とする意見が14.9%である。

その他、「今まで、何気なく見ていた未満児の動きや音楽活動が、見過ごせなくなった」「今までは未満児には音楽活動が必要だと思っていなかった」といったように、「未満児について意識するようになった」という意見が6.8%、あるいは「3歳未満児の音楽活動の領域がこんなに広いとは思っていなかった」という活動の範囲に関する意見が2.7%、以下「色々な技術があることが分かった」「VTRを見て未満児に対する気持ちが変わった」が、ともに2.7%、「以前より真剣に考えるようになった」「しっかり勉強しなくては行けないと思った」「うまく教えられるのか心配になった」1.4%というような結果となっている。

以上のようなことが、未満児の音楽活動について意識が変化した理由として挙がっている。これらのことからみて、学生は講義を受けた段階で、未満児の音楽活動の重要性や活動の内容が漠然とながらも意識でき、その必要性を感じ取れたようである。

意識の変化はなかったと回答した5.4%の学生は、「既に高校時代に学習していたので知っていた」「まだよく理解できていない」と言ったことがその理由として挙がっていた。後期意識調査のなかで、実技学習をすることによって意識がどのように変わったかを聞いた結果、100%の学生が変化があったと答えている。その理由としての学生の具体的な意見を幾つか挙げておく。

- 1) 何をその子供達に指導していくか、最初は分からなかったが、少しは分かったような気がする。年齢によって活動が変わるし、何ヵ月か月齢が違っただけで、できることがだいぶ変わってくるので、子供達の成長の程度にあわせた指導をしなくてはならないと思った。
- 2) 2歳児頃でも5歳児頃でも、同じように動けるような錯覚をしていました。2歳児にはとてもできないと思われるような活動を、実際にしてしまいました。実技が終わった後で、自分達のVTRを見たり、他の班の実技を見てそう思いました。
- 3) 自分達の行った実技では、子供の音楽活動に適していないところが数多くあったと思う。子供に対して難しいことを要求していた。色々なところを見直さなければならないと思いました。
- 4) 自分達が考えているほど簡単には指導することができないということが分かりました。もっと1つ1つの動作を大きく、ゆっくり表現しないといけないと思いました。同じ動作の繰り返しやリズムが大切だと思いました。
- 5) 考えていた音楽活動がその年齢には少し無理だったり、長過ぎたりということが、実際にやってみてよく分かった。それと、子供を前にして、1人で歌を歌う保育の活動が、予想以上に難しかったので、実技をやってみないと分からないことが多いと感じました。
- 6) 自分で実技をしてみて初めて、その難しさと、年齢に適した音楽活動の重要性が分かってきた。そして、もっと子供にとって活動しやすい方法はないかと考えるようになった。
- 7) 自分の考えていた3歳未満児というのは、赤ちゃんというイメージが強くて、何の歌を歌っ

でも同じような気がしていた。実技を行うために、発達段階にあった曲を選ぶ作業をすることによって、2歳児ならばこれくらいの曲を与える、これくらいなら理解でき、子供も一緒に遊ぶことができそうだななど、いろいろ考えるようになった。

以上のような意見から、理論的な学習で未満児についての大まかな意識変化の後、実技を実際に経験したことで、さらに、いつ、どのような方法で音楽活動を行ったら良いかという指導方法についての具体的な理解ができてきたと考える。そして、実技やVTRを再度見た後の調査では、意識の変化があったとの回答した学生が96.1%で、前期調査と比べて上昇した数値は1.5%と僅かではあるが、一見、音楽とは無関係に見えるような子供の小さな反応にも気付いたり、子供の中に秘められているものを読み取ろうとする保育者の目などにも関心を示したり、現場の保育者と子供の姿を実感としてつかむことで、数値に現れた以上に、より具体的な理解へと発展したといえる。

「最初は子供の動きに気を取られていたが、2度目のときは、保育者の子供に対しての語りかけや、手遊び、歌の歌い方などに注意してみた」「以前は見ているだけと言った感じでしたが、今回は保母の活動の一つ一つが考えさせられました」という「保育者の子供への接し方を注意して見た」が24.3%、「自分達の行った実技と照らし合わせて見た」が14.9%、「自分達のやったことをもう1度、あの場合はあのようにして良かったのかと振り返りながら、反省しながら見た」や「実技をした後でVTRをみると、話す速さや歌い方が、自分達が行ったものと随分違うなどと思った」など、ビデオを2度見ることで、実際に行った実技の反省をし、子供達の動きを捕らえようとする目や、具体的な指導の仕方など、音楽活動の取り組みに対して真剣になっている様子が伺える。「語りかける時や歌うときの声の高さや速さなどを、学習前は考えていなかったが、VTRを見て学びとれたように思います」「初めは、何気なく見ていたが、今回は、こんなときはこのような歌を歌い、そしてこんな動きをするのだなど、少し理解できました」といった「指導方法が具体的に理解できた」が12.2%、そして、「子供の発達段階にあわせ、指導目標、ねらいを考え、きちんと計画を立てて活動をしなければいけないことを感じました」「このくらいの年齢のときは、どのようなことが大切で、そのための活動はどのようなことをさせるのかを改めて考えさせられました」というように「発達段階と指導法の関連が理解できた」が10.8%となっている。「3歳未満児の音楽活動は、歌を歌って聞かせたり、歌に合わせて体を動かしたりするなど、歌って聞かせることが大切だと思いました」「一つ一つの歌を、子供の心をひきつけるように心をこめて歌って聞かせることが大切だと思う」といったような「歌唱による活動の重要性を感じた」という学生が9.5%、「保母の責任の重さを感じた、不安になった」、あるいは「子供の発達段階を把握できた」といった意見が同じく9.5%、「保育者の働きかけによる子供の反応を意識して見た」という子供の实態をつかもうとしている学生が8.1%、「ただ歌を歌うだけでなく、どうしてこの歌を歌うのかという意図をはっきりさせる必

要があることが分かりました」「赤ちゃんに話しかけるのを見て、あっ、これはこういうことを目的としてやっているんだなということが分かりました。そして目的をもった活動の必要性を痛感しました」と「指導の目的をもって活動することが必要だと思った」が6.8%、以下「生活の中に音楽を取り入れることの大切さを感じた」4.1%、「未満児の音楽活動の重要性を感じた」2.7%、「園や保育者の指導方針による違いを感じた」2.7%、「今後、自分としてはどのような点を研究し、発展させれば良いかというところを見つけ出せたと思う」といった「今後勉強すべき課題を見つけた」が2.7%という結果であった。

意識が変わったとする理由は様々であるが、再度VTRを見たことで、実技学習の反省と確認、問題点の発見、また発達段階の把握と同時に、発達を考慮した活動の重要性、さらに、保育者と子供とのかわりにおいても、保育者の目で子供を捕らえる方向にむくようになるなど、未満児の音楽活動に対する意識も、理論学習の時よりも具体化してきた。

なお、「いいえ」については、その理由についての記述がなかったが、VTRをみたことによる意識の変化はなかったようである。

「無回答」については前回のビデオ学習に欠席していたために、その比較ができず無回答となっていた。

実際に、未満児に触れ、肌で感じて子供の状態をつかむことが一番望ましいが、現状において、それはなかなか困難である。ビデオ機器の使用は、写真や文字から得る情報よりも印象が鮮明で、自然な状態で子供を把握させることができ、未満児の発達状態及び音楽活動の理解が、より確実なものとなった点で成果があった。

「未満児の音楽活動についてどのように考えたら良いか」という質問に対しては次に示す通りである。

- ・一人ひとりの発達段階に応じた活動を行う 26.3%
- ・歌ったり、楽器を聞かせたりと、しっかり聞かせる活動を行う 21.1%
- ・笑顔で愛情をもって、語りかけたり、歌いかけたりして子供に接することが大切である 15.8%
- ・子供一人ひとりに個別に接し、活動することが必要である 13.2%
- ・子供が音楽に興味を持つような活動を進めていくことが大切だと思う 13.2%
- ・保育者自身もが音楽を楽しみ、そして子供にも自然な形で活動ができるようにすることが大切である 9.2%
- ・生活の一部として音楽活動を捕らえることが大切である 5.2%

(複数回答のため100%を越える)

以上のような結果であった。

3歳未満児、特に乳幼児は受け身である状態が多いために、音楽の活動として扱いにくい

で、その行為の大切さに気づかず、見過ごしてしまいがちである。しかし、未満児の音楽活動をVTRで見たり、学習したことで、日々の生活のかかわりの中に音楽活動が存在すること、子供一人ひとりに、個別に接する活動を行うことの大切さ、あるいは、発達段階を把握した活動を行うことの重要性を認識できたようである。

4. 考 察

今回の教育方法による学生の意識変化を踏まえ、養成校での3歳未満児の音楽指導について考察してみたい。

未満児の音楽活動に関する研究として、その発達段階や実態についての論文や文献は多くみられるが、養成校における教育方法についてはあまりない。未満児の音楽指導は、やがて主体的な活動に芽生える前段階の時期として重要であると感じられながらも、養成校での音楽教育として取り上げられないという傾向にある。その原因としては、

- 1) 未満児の音楽活動は「遊び」の中で扱われており、領域として独立していない。
- 2) 未満児の音楽活動は音楽指導としては扱いにくい。
- 3) 養成校においては技術的な指導に重点が置かれている。

といったことが考えられる。

確かに、未満児の音楽活動は「音楽前活動」とも言われ、日常の生活の中での語りかけ、歌いかけ、表情や視線、また、しぐさなど保育者の何気ない働きかけを通して行われることが多く、音楽指導として扱われにくい面を持っている。そのために、思いつきで行われる活動の連続になりやすく、未満児の生活の中にある音楽的な要素を見過ごしたままの保育になりかねない。3歳になったから歌える、楽器が弾けるといった活動が急にできるようになるのではなく、それにつながる未満児の音楽活動をどのように捕らえ、行っていくかが、3歳以後の活動に大きく影響していくのである。

一般に、「音楽リズム」の教育方法としては、歌う、弾く、あるいは動くなどの活動を中心に、音楽的な表現技能の向上を目的にした指導法が取り上げられる場合が多い。したがって、養成校においても2年という期間を考慮し、活動を具体的に行うために必要な学生の技術向上を目指した指導に重点が置かれている。技術指導が必要なことは当然であるが、技術指導を重視することは、保育者を養成する場合には、音楽を使って子供の行動を規制したり、子供の主体性を認めないような押しつけの活動を要求したりといったような、子供を見る目に柔軟性を欠く働きかけや指導をする結果になりはしないだろうか。2年間だからこそ、保育者になる学生にとって必要なことは何かを考えたい。子供一人ひとりを見つめ、その子供の発達を見通し、今、何を求めているのか、今、その子に何か必要なのかを、成長・発達を理解し、要求をくみ取った音楽活動の指導ができることが大切なことであろう。

今回のような教育方法により、未満児の発達段階を理解し、音楽活動の重要性を認識することができ、子供をたえず成長していく大きな流れの中で捕らえられ、

- 1) 子供一人ひとりの発達段階を把握することの重要性を理解できる。また、発達の過程での保育者の働きかけの方向がみえてくる。
- 2) 子供の生活と別の部分で、音楽活動があるのではない。子供との日々の生活のかかわりの中に存在する。
- 3) 3歳以後の音楽活動の捕らえ方、取り組みの姿勢が違ってくる。

という点で、保育者の「音楽リズム」に対する認識や構えが変わってくると考える。

以上、養成校での「3歳未満児の音楽指導」の学習は、保育者となる学生に「音楽リズム」の捕らえ方を方向づける重要な意味を持っていると考える。

【文 献】

- 1) 三好良枝・藤岡明子：全国保母養成協議会第25回研究大会発表論文集 p. 76～77 (1986)
- 2) 厚生省家庭児童局編：保育所保育指針、ひかりのくに (1977)